

〔翻刻〕 奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本） 卷十一～卷十二

（人文・社会科学 日本古典文学研究室） 小助川 元太

【凡例】

- 一．底本は奈良県立図書館所蔵『帝鑑図説』（一二巻、寛永四年（一六二七）、八尾助左衛門尉版、請求番号貴重書庫388.491-1）により、今回は卷十一と卷十二を翻刻した。なお、本テキストの卷一から卷四の翻刻については、小助川「〔翻刻〕奈良県立図書館所蔵『帝鑑図説』（卷一～卷四）」（『呉工業高等専門学校研究報告』七〇号、二〇〇八年八月）に、卷五と卷六の翻刻については、「〔翻刻〕奈良県立図書館所蔵『帝鑑図説』（卷五～卷六）」（『愛媛大学教育学部紀要』第五九巻、二〇一二年一〇月）に、卷七と卷八については、「〔翻刻〕奈良県立図書館所蔵『帝鑑図説』（卷七～卷八）」（『愛媛大学教育学部紀要』第六〇巻、二〇一三年一〇月）に、卷九と卷十については、「〔翻刻〕奈良県立図書館所蔵『帝鑑図説』（卷九～卷十）」（『愛媛大学教育学部紀要』第六一巻、二〇一四年一〇月）に掲載している。

二．本書には各話ごとに一丁分の挿絵があるが、誌面の都合上割愛し、本文の翻刻のみとした。

三．本文には虫損による判読困難なところが数箇所見られるため、京都大学図書館近衛文庫蔵『帝鑑図説和訓』（一二巻、慶安三年（一六五〇）、請求番号01-847-1 貴）を参照して補った。

四．旧字体・異体字・俗字などではできるだけ通行の字体に改めた。

（例）「國」↓「国」、「臺」↓「台」、「醫」↓「医」、「迄」↓「迄」、「當」

↓「当」、「總」↓「総」、「哥」↓「歌」、「會」↓「会」

五．底本の誤字などはこれを尊重し、とくに改めなかった。

六．カタカナの「ハ」・「ミ」などはひらがなに統一した。

（例）「くはうてい」↓「くほうてい」、「よびしハ」↓「よびしは」・「したしミ」↓「したしみ」

七．踊り字については、ひらがなで翻刻した場合は「ゝ」「ゞ」、カタカナ

の場合は「ゝ」「ゞ」、漢字の場合は「々」に統一した。また、「く」については、送り仮名と漢字については文字になおし、それ以外はそのままとした。

八．読解の便を考慮し、私に句読点等を補った。

九．濁点は本文のままとした。

十．改丁箇所については明記したが、改行についてはとくに示していない。

十一．丁数については、実際の丁数と柱の丁番号にズレが生じているため、実際の丁数を示しているところがある。

【書誌】

〈形態〉古活字本。

〈巻冊〉十二冊。ただし、六冊ずつ上下二冊の合本形態。

〈丁数〉巻一のみ序文「帝鑑図説和本序」三丁分あり。その他、各話ごとに一丁分の目録あり。巻一（二六六）、巻二（二二三）、巻三（三三四）、

卷四（三十一）、卷五（三十九）、卷六（四十六）、卷七（三十）、卷八（二十八）、卷九（三十二）、卷十（三十三）、卷十一（二十七）、卷十二（二十一）

〔表紙〕 無地黒表紙。

〔装幀〕 袋綴。版心に柱題「帝鑑一卷（十二卷）」および丁数あり。

〔寸法〕 縦二十八・四糎、横二十・七糎。

〔行数〕 每半葉十一行書き。界線なし。

〔外題〕 題簽無地白。左上。「帝鑑圖説 二」「帝鑑圖説 三」ほか。（数字部分は各卷の卷数）ただし、卷一、九、十、十一は題簽なし。

〔内題〕 「帝鑑圖説卷第一」ほか。（数字部分は各卷の卷数）

〔印記〕 各卷本文第一丁表右下「奈良縣立奈良圖書館印」

〔刊記〕 卷十二本文十九丁裏六行目から九行目まで。

〔干時寛永四丁年

十一月下旬

洛陽三条寺町誓願寺前

八尾助左衛門尉開版」

〔付記〕 『帝鑑図説』の閲覧・翻刻に際しては、奈良県立図書館の御高配を賜った。また、書誌について高木浩明氏からご教示を賜った。記して御礼申し上げる。

本稿は平成二十六年科学研究所補助金（基盤研究（C）「中世百科全書的テキストの成立基盤に関する総合的研究」課題番号 24520218）による研究成果の一部である。

【翻刻】

（表紙）（題簽なし）

帝鑑図説卷第十一目録

金連布地	捨身佛寺	縦酒宴殺	華林縦逸	玉樹新声	剪綵為華	遊幸江都	斜封除官	観燈二市里	唐の中宗
金連布地	捨身佛寺	縦酒宴殺	華林縦逸	玉樹新声	剪綵為華	遊幸江都	斜封除官	観燈二市里	唐の中宗
金連布地	捨身佛寺	縦酒宴殺	華林縦逸	玉樹新声	剪綵為華	遊幸江都	斜封除官	観燈二市里	唐の中宗

「（目録裏）

帝鑑図説卷第十一

金連布地

齊の国のあるじに宝巻と申せしあり。然るに宝巻、淫乱におごらせたまひて、きさきごのみをし給ふ事、よにたぐひはなかりけり。故に、后たち、我おとらじと身をかざり、だうぐ衣裳にいたるまで、世にめつらしきものをとめ、はなやかにこそきこえけり。されども、第一のきさきに潘妃と申ておはせしが、君のてうあひたぐひなし。ある時、宝巻、黄金をもつてれんげをつくり、御殿のまへに是をしき、すなはち潘妃を此うへをあゆませられけるとかや。宝巻つくく御（一丁表）らんじ、御よろこびましくての給ひけるには、誠なるかな、潘妃がすがた、よにたぐひなき事なれば、あゆむあしのしたまでも、こがねのれんげをしやうずる事、ためしなき次第とて、

よるこび給ふはかぎりなし。かゝる多いぐわにおごらせ給へば、近臣寵愛の人々たち、君のこゝろにひかされて、榮花におごらざるはなし。故に、人々、たがひによくしんおこりつゝ、たみ百性にいくわやくをかけ、たみのたからをうばひたり。われおとらじと多いぐわをなす。しかるあひだ、たみ百性、けふはきのふにおとろへ、かまどをにぎはす事もなく、だうろにまよひでながら、りうてい(二丁裏) あこがれなきさげぶ。かみ一人の心により、しもばんみんのなげきのほど、申はをろかなりとかや。故に、宝巻、くらゐにそなはり給ひてより、わづか二年もすぎざりしに、王珎国と申もの、つゐに君をほろぼして、蕭行すなはち斉の国をうばひとらせ給ふとかや。是をもつてあんずるに、つねに善事をなさざれば、わざわひその身におよぶ事、さらにのがるゝ所なし。(二丁表)

白紙 「(二丁裏)

挿絵 「(三丁表)

挿絵 「(三丁裏)

捨身佛寺

梁の武帝と申てみかど一人ましませり。然るに御門、仏法をうやまひたまひて、ほとけのおしへにまよひ、みづから同泰寺と申てらへみゆきせさせ給ひつゝ、あまたの僧をくやうし、もろ／＼の人をあつめて御衣をぬぎすて、みづからころもをちやくし給ひて、清淨大捨施の法をおこなひ仏戒をたもち、御身を寺裡にすてゝ、ねむるときは素床にふし、食するときは瓦器をもちゐ、坐する時は小車にのり、天子のくらゐをさつて、出家のさまに身をへんじ、みづから講堂の法座にのぼらせ給ひて、僧俗大衆のために涅槃經を(四丁表) とぎ給へり。されば仏家のしやくもんんに、人しゝさつて、かばねはむなしくなりぬといへども、妙なる心はくちずして、つねにせかいにあ

るとかや。たゞこれ生死の二つをといて、涅槃經とは申なり。武帝、此經をつねにしんじ給ふゆへ、大衆のためにとき給ふ。しかるに、いづれも臣下たちおもはれけるは、武帝のこゝろまよひつゝ、だうぜんのくらゐをさり、御身をすてゝ仏寺にいらせ給ふ事、こはいかゞすべきとて、すなはち錢十萬貫をいだして、仏前にこれをそなへ、武帝を贖出し、表をかいいていさめをなす。君すみやかに宮中へかへらせたまひて、國家の政を(四丁裏) きこしめされ候へかすと、みな／＼いさめをなせしかども、武帝、いさめにしたがひたまはず。故に、臣下たち、こはいかゞと思ひ、三度までいさめをなす。武帝、いさめにたへかねて、つゐに宮中へかへらせ給ふ。それ仏家は父母妻子をさり、我が身をすて、家を出て、かいぎやうをたもつ事、これ夷のをしへにして、天下をたもつべきみちにあらず。まことなるかな、武帝は宗廟社稷のおもんずべき事をおもはず、又、國家ばんみんをおさむべき事をはからず、なんぞ身を仏寺にすてゝ、ほとけのいましめにまよひ給ふ事、おしみてあまりあり。其後、武帝の子孫侯景の(五丁表) ときにいたりて、國家おほひにみだれ、台城に餓死をすといへども、なんぞ仏のたすけあらんや。(五丁裏)

挿絵 「(六丁表)

挿絵 「(六丁裏)

縦酒宴殺

齊の国の主に高洋と申君あり。然るに、高洋、つねに酒をこのませ給ひて、あけくれしゆゑんにひまもなし。さげだにもすぎぬれば、あくぎやくぶたうをし給ふ事、たとへをとるにためしなし。されば、御殿の庭中に人をにる鐘、人をひくのこぎり、人をくだくうす、其外いろ／＼の道々をおかせ給ひつゝ、酒によはせ給ふ時は、手づから人をころさせ給ひてあそびたはぶれましませり。

しかるに、宰相の官に楊愔と申臣下あり。君ぶたうにまし／＼て、つみなき人をころさせ給ふをあはれみ、あまたのめしうとのその中に、その「(七丁表)」とがおもうして、しざいにおこなふへき者をゑらみ、庭前のかたはらにあつめおき、これを名づけて供御囚といへり。君、酒によはせたまひて、人をころさんとの給ふときは、すなはち、このめしうとをいだして、きみのおほせにしたがへり。つら／＼あんずるに、それ人の命はおろそかにおもふべからず。たとひいかなる罪人なりとも、三度きみのせんじをかへし、五度君へそうもんして、さてその後ころすべし。故に、夏の禹王は道のほとりにてざいにんを見て、車よりおりさせ給ひて、なんだをながし給ふ事、これ人のいのちをかるしめ給はず、たみをあはれみ給ふゆへ」(七丁裏)なり。しかるに齊の高洋はあくぎやくぶたうにましまして、あまたとがなき人をころし、つみをつくらせ給ふ事、たみ百性にいたるまで、たれかこの君をうらみざらんや。さればにや、高洋、はじめ御くらぬにつかせ給ふときは、ころををつくし、たみをあはれみ、まつりごとをたゞしくおこなひ給ふといへ共、其後酒をこのませ給ふゆへ、をのづからころみだれて、つゐにぶたうのきみとならせ給ふ事、おしみてもなをあまりあり。」(八丁表)

白紙 「(八丁裏)

挿絵 「(九丁表)

挿絵 「(九丁裏)

華林 縦逸

齊の国のあるじに緯と申君あり。つねに琵琶をひく事をこのませ給ひて、いろ／＼の曲をひかせ給ふ。其こゑいとあはれげにして、きくものころにかんじ、きもにめいじて、あはれまざるはなかりけり。則、是を名付て無愁の曲といへり。されば無愁の曲となづけ給ふ事は、われこの曲をひいて、なが

くころをたのしみ、さらにうれしいなかるべし。故に、ばんみん、又、君をなづけて無愁の天子と申なり。あるとき君、花林園のうちにおゐて、貧児材と申て、一つの貧家をたて、つねにみづから此家にすまぬし、身にはあいぞめの「(十丁表) いしやうをめされて、乞食すがたにさまをかへ、こゝかしこにいたりて、食をこうてぞあそばれけり。かゝるにあはぬありさまをして、ほしひまゝにたのしみをなし、さらにやむ事あらざれば、つゐにその身をほろぼして、国をうしなひ給ひけり。」(十丁裏)

挿絵 「(十一丁表)

挿絵 「(十一丁裏)

玉樹 新声

陳の国のみかどに、叔宝と申せしあり。御くらぬにそなはり給ひてより、いんらんにおごり、ゑいくわをこのみ給ふ事、たとへをとるにためしなし。しかるに、みつの台をつくり、一つは臨春閣と名づけ、一つは結綺閣といひ、一つは望仙閣となづけたまへり。此うてなのたかき事、数十丈、ひろき事、数十間、いづれもまどやらんかんをば、沈香梅檀の木をもつてつくり、又、うちのかざりには、金玉をちりばめて、其くわれないなる事は、近代いまだためしなし。又、叔宝、つねにおんぎよくをこのませ給ひて、宮女のうち、文学あるもの「(十二丁表) 人をゑらみ、女学士となし、又、臣下のうちに文学あるもの、江総・孔範がたぐひをゑらみいだして、ゆるして宮中へめされ、此二人のものを狎客となされ、つねにしゆゑん・ゆふきやうのときは、御まへにはんべらしめて、女学士と狎客とに、たがひに詩をつくらせて、其なかにもよき詩をばふしをつけてうたはしめ、びは、ことのしらべにのせ、宮女千余人をすぐりて、則、これをうたはせて、もつてしゆゑんのものとしみとす。されば、此曲をば玉樹後庭花の曲、又は臨春のきよくとて、それ／＼に

おんがくの名をつけ給へり。此曲のうち、おほくはびじんの事をつくれり。かやうに君臣くんしん」(十二丁裏) まじはりて、しゆゑんをなし、うたをうたひ、おんがくをそうして、夜終よすがらゆふらんし、すでにその夜もあけぬる事、毎日まいかくのことくなり。それ天下の君たる人は、つねにざいはうをおろそかにせず、ばんみんをめぐみ、たゞしく天下のまつりごとをおこなひ、我が身にあやまちあらん事をおそるべし。されば、書しよにいわく、内うちには女色ぢよしよくにおごり、外ほかには山野さんやのかりをこのみ、又はしゆゑんをたのしみ、おんがくをこのむ事、この四つのもにおゐて、一つもこのむものならば、かならず国をほろぼすへし。しかるに、陳ちんの叔宝しゆくほうは、この四つのも、いづれも我が身にこのませ」(十三丁表) 給へば、国をおさめたまはんとおぼしめし給ふとも、いかでかかなはせ給ふへき。」(十三丁裏)

挿絵 「(十四丁表)

挿絵 「(十四丁裏)

剪きつて 綵さいを 為つくる 華はなを

隋すいの煬帝やうていと申て御門みかど一人おはしける。然るに、煬帝、あまりゑいぐわにおごらせ給ひて、宮中きゆうちゆうのほか、又べつに宮殿きゆうてんをいとなみ、これを名づけて西苑せいえんといふ。されば、ぢぎやうのひろき事、四方はうへめぐれば二百里にひゃくりになり。その中に海うみをなし、海のまはりは十余里じよになり。又この海中かいちゆうに蓬萊ほうらい・方丈ほうぢやう・瀛州えいしゆうとて、三つの山をつかせ給ひて、東海中とうかうちゆうの三神山さんしんざんをかたどれり。山のたかさ百餘尺ひゃくじゆさく、しかるに三つの山のうへにうてなをたて、宮殿きゆうてんをいとなみ、のきばをつらねてすきはなし。又、海より北きたのかたに一つのほりをほりて、水をひきて海へ」(十五丁表) そゝき、海と川とをまじへたまへり。すなはち、此河かのほとりに十六ところつばねをつくり、あまたの美人びじんをおき、つばねごとに四品しん

のきさきをそなへ給へり。まことにつばねを花麗くわうれいにして、ほしひまゝにゆふらんあり。又、秋冬の時節じせつにいたりて、宮前きゆうぜんの樹木しゆもくはなちり葉おちぬれば、すなはち、五色しきごのきぬをきり、花をつくり、はをつくりて、木々のえだにこれをつけて、まことに春はるのけしきなり。又、池いけのなかにも五色のきぬをたち、荷はすをつくり、ひしをつくりて、水のおもに是をうかべ、春夏のけいきのことくなり。もしはなのいろかはりぬれば、あらたにつくりてふるきにかふ。それ」(十五丁裏) 榮花えいかわにおごり給ふ事、たとへを取てためしなし。然るに、十六ところのつばねのきさきたち、花をつくり、はをつくりて、こゝをせんどゝかざりつゝ、たがひにこれをあらそひて、君のみゆきをのぞみけり。されば、煬帝やうていの御ゆふらんまします事、まいにちおこたる事なしといへとも、いまた御ころにたらずして、月のよすから馬にのり、おなしく宮女きゆうぢよ数千かずせんぎをともしたまひて、苑そののうちにゆふらんし、詞人しじんに仰せて清夜遊せいやゆうの歌曲かきょくをつくらせ、御みどもの宮女きゆうぢよに、馬上ばしやうにおゐてこれをうたはせ、御いふらんにひまもなし。さてそれよりも、江都かうとと申ところへ、はる(十六丁表) 〳〵みゆきなされつゝ、御いふらんのあまりにや、ひさしくかへらせたまはずして、つゐに国くにをうしなひ給ふ。つら〳〵あんずるに、煬帝やうていの御父文帝みちふんていは、つねにりよくをこのませ給ひて、たからをつむ事山のごとし。煬帝てい、はじめ晋王しんわうとなつておはせしかとも、つゐにざんげんして太子たいしをころし、則すなはち、くらいをうばひとり、はじめてくらゐにそなはり給ひてより、国家こつかに財宝さいほうのおゝきを見て、たちまち榮華えいわにおごりたまふ。こゝをもつてあんずれば、随すいの天下てんかのほろぶる事、ひとり煬帝ていのとがみにあらず。これ文帝ふんていのあやまちなり。されば、天下の君きみたる人、後世こうせい」(十六丁裏) しそんあんらくにして、国家こつか長久ちやうきゆうの事を思ひなば、子孫そんにしめすにうやまひつゝまやかにして、仁儀じんぎの道みちをもつておしへをよゝにのこすへし。才さいはうをたくわへて、子孫そんに阿あたうるものならば、かならず天下をほろぼすべし。」(十七丁表)

白紙 一 (十七丁裏)

挿絵 一 (十八丁表)

挿絵 一 (十八丁裏)

遊二・幸 江 都 一

隨の煬帝、ある時御ふねにめされ、水上にしたがひて、揚州の江都へみゆきし給ふ。のらせ給ふ龍のふね、その高太なる事は申もおろかなるとかや。則、舟のうへに四ちうにたかく殿をつくり、上には正殿・内殿・朝堂として、三つのざしきをたてならべ、さてその次には百二十のつぼねをたて、さてそのつぎは金玉をもつてかざりをなし、はなやかにつくらせ給ふ。第四ばんめをは、内侍の官のおる所としたまへり。また、御きさきのめされたる舟をば、名付て翔麟舟といへり。龍しうよりもすこしきなりといへ共、そのくわれい(十九丁表)なる事は、まことにこれ、いちやうなり。そのほか九そうのふねあり。なづけてこれを浮景といふ。この九そうのふね、いづれも三重に殿をつくりて、離宮の館をかたどれり。このほか数千そうのふねには、後宮・諸王・公主・百官いづれもこのふねにのる。また、ふなこ八万余人、みな錦の衣裳をきて、こゝをせんとかさりけり。また、あまたのぐんびやうども、数千そうのふねにのり、きみをしゆこしたてまつる。かやうにおほくのふねなれば、そのあとさきにつゞく事、二百余里のあひだには、水のいろめは見えさりけり。又、馬にのりたるぐんびやう共、君の御座ふねをさし(十九丁裏)はさみて、りやうはうのきしをゆく。此とをらせ給ふみちすがら、五百里のうち、国々こほりくより、いんしよくをたてまつる。そのおほき事、一州よりも車百両はかりにや。山海のちんふつをつみて、われおとらじとたてまつる故に、せんちうの人々、美食ちんぶつおしくして、くひつくす事、あたはざれば、おほくはこれをすてにけり。それ煬帝は、我が身ひとり

のたのしみをなし、たみ百しやうのうれいをしらず、かゝる榮くわをなしたまへば、いまだ江都よりくわんぎよあらざるに、長安・洛陽の二つのみやこもすでに他人にうばれて、くらゐをうしなひ給ふ事、(二十丁表)是天下の君たる人、かゝみとすへき所なり。(二十丁裏)

挿絵 一 (二十一丁表)

挿絵 一 (二十一丁裏)

斜・封 除レ 官 一

唐中宗と申て、御門一人おはしける。御くらゐにそなはり給ひてより、つねに酒このみ、女色におぼれて、国家のまつりごとをもつとめたまはず、よろづ朝廷のしよくじをもつて、御きさき皇后韋氏にはからはせたまひけり。これによつて、まつりごとすたれ、朝廷のしよくじもみたれぬ。然るに、韋後の御むすめ安楽公主、おなじく長寧公主、又、そのいもうと鄰国夫人、その外、宮女上 官婕妤、また尚容柴氏・女巫英兒、何事も此宮女たちばんじをほしひまゝにして、国家の官職をもつて、みつからいてうられけり。故に、本(二十二丁表)よりいやしきものといへ共、三十くわんの錢をいたせば、そうなくみかどの御はんをいたゞき、たつとき官位にあかりけり。しかる間、天下の人、官をかい、くらゐに阿かるをなづけて、斜封官といへり。又、上官婕妤の宮女たち、君のはつとゆるかせなれば、いづれもほかに家をもち、いてたき時はほかへ出で、またかへらんとおもひぬれば、こゝろにまかせてかへりけり。かやうにみたりにありぬれども、さらにとがむる人はなし。故に、くわんにん共、宮女たちの袖をひき、むつまじげにぞみへにけり。かゝるみたりのありさまは、たとゑんかたはなかりけり。つらくこれにあん(二十二丁裏)するに、中宗ひさしく武氏が乱にあひたまひて、ひんくにくるしみ、かんなんをいとひたまひしも、つゐにりうんをえて、くらゐ

につかせ給ふゆへ、にはかにこゝろゆるかせにして、さいくわ榮花におごりましますゆへ、天下のはつとみだりにして、きみをおそろゝものはなし。いまたいく年すぎざるに、いこう韋后、すなはち則、心をへんじ、きみにどくをかひぬれば、たちまちむなしくなり給ふ。まことにぜんしやのくつがへるは、こうしやのいましめたとかや。それ天下の君たる人、ちうそう中宗をもつてかゞみとすべし。」(二十三丁表)

白紙 「(二十三丁裏)

挿絵 「(二十四丁表)

挿絵 「(二十四丁裏)

みる観 ともしひを燈 し市 りに里

唐の中宗、末年のころ、天下のまつりごとをば宮女にまかせて、御身はこゝろのほしひまゝにして、あけくれゆふらんをたのしみ給へり、ある時、正月ぐわん日の夜すがら、御きさき韋皇后をとまなはせたまひて、ひそかに禁中をしのび、いちまち市町のちまたにいであら、たうろう灯籠を御覧じて御なぐさみとしたまへり。それ、てんかの君たる人は、はんしやう万乗のたつときくらぬをもつて、きうちやう九重のかみにおり、まつりごとをつとめて、ゆふらくをいましむべし。いはんや中宗は、一たび天下の乱にあふて、今又、そのうれいをわすれ、よろづにつけてつゝし「(二十五丁表)たまはず、まさしく天子のくらぬをもつて、市町へしのび出、いやしきたまとまじはりて、かなたこなたとゆふらんし、ことさら御きさきをとまなはせ給ふ事、これなんのいはれぞや。一つにはれいぎの道をうしなひ、二つにはちぬをくらし、三つには天下の法度をやぶり、四つにはいんらんのもとひをなす。是を四つのいましめとす。されば、唐の中宗は、此四つのいましめをやぶり、おごりをきはめ給ふ事、これ万世のかゞみたり。帝鑑図説卷第十一終 「(二十五丁裏)

挿絵 「(二十六丁表)
挿絵 「(二十六丁裏)

(表紙)

帝鑑図説卷第十二目録

龍二幸	番	将	唐の玄宗
斂レ財	修	費	唐の玄宗
便殿	擊	毬	唐の敬宗
龍二信	伶	人	唐の敬宗
上清	道	会	唐の敬宗
應奉	花	石	宋の徽宗
任用	六	賊	宋の徽宗

「(目録表)
「(目録裏)

帝鑑図説卷第十二

てう龍 かうす幸 はん番 しやうを将
唐の玄宗皇帝と申て、御門一人おはしける。この時ひとりの胡人あり。その名を安禄山といふ。玄宗、かれをもちゐたまひて、范陽といふところの節度使となされ、又、御史大夫のしよくをもつかさどらせたまひけり。しかるに、安禄山、しんたいおほきにこへて、腹たれて、ひぎをすぐほかは、ぐちなるていにして、心のうちはじやけんなり。玄宗、かれがこへたるていを御

覽じて、とはせ給ひけるやうは、なんじがはらの中には、いかなるものゝありければ、かゝるおほきに「(二丁表) こへたるぞ。祿山、このよしうけたまはり、すなはち申けるは、されば、それがしがふくちうには、べつなる物は候はず。あかききもが候のみ。玄宗、きこしめされて、御よろこびはかぎりもなし。又、かれが宮中へいでいりする事をゆるさせ給ふ。あるとき、玄宗、楊貴妃とおなじぎにましますとき、祿山、すゝみいでゝ、まづ楊貴妃をらひはいて、つぎに玄宗をらひはいて。このゆへをたづぬるに、玄宗、楊貴妃を御てうあひましますゆへ、まづ楊貴妃をうやまひて、玄宗の御こゝろをよろこばしめんがためとかや。玄宗、かくとはしろしめされず、御ふしんにおぼしめし、則、「(二丁裏) 祿山にとはせたまひけるは、まづ楊貴妃をらひはいて、つぎにわれをうやまふ事は、いかなる事ぞといたまふ。祿山、こたへて申けるは、それ、わが国のならひにて、まづ母をらひはいて、つぎにちゝをらひはいと、かやうに申あげしかば、玄宗、かれがいつはりを申事をばしろしめされずして、御よろこびまませり。又、あるとき、玄宗、勤政楼にうつらせ給ひて、もろゝの臣下をあつめ、みぎひだりにはんべらせ給ひて、御さかもりの事なるに、君はひがしのかたにざし給ひて、金雞の障子をたてゝ、御坐をべつにぞかまへけり。この時、きみの仰せにて、安祿山をば「(二丁表) もろゝの臣下のかみ座になをし、かたじけなくも御まへのみすをあげさせ給ひて、祿山をちかづけて、御物かたりなされけり。ある時、張九齡と申者、玄宗を諫けるは、安祿山がていを見まいらすに、かならずむほんをなすへきものとぞんずるなり。ねがわくは、かれをしりぞけましゝて、二たびちかづけ給ふべからずと、しきりにいさめたてまつりしかども、玄宗きゝ入まします、いよゝゝ祿山を近付給へり。其後、祿山、むほんをおこして、唐の天下をくつがへす。然るに、玄宗、張九齡が申せし事をおもひださせ給ひて、こうくわいいたしますといへ共、なか其かいあらざらん。」(二

丁裏)

挿絵 「(三丁表)

挿絵 「(三丁裏)

斂財 侈費

唐の玄宗皇帝、たからをこのませたまひて、財宝をおし給ふ事、たとへをとるにためしなし。こゝに江淮といふところに、韋堅・王鉄と申て二人の者のありけるが、禁中へしゆつして、きみのざいほうをこのませ給ふよしを見て、すなはち、まかりかへり、たみ百性のざいほうをうばひとり、我が君へたてまつりて、君をよろこばせ申さんとて、まづあらたにふなちをつくり、瀧水をひいてふちとなし、功淮のふねをあつめて、かのふちにかべ、きみを望春楼へしやうじたてまつり、此よしを見せまいらせ、又、あらたにふね「(四丁表) 数百艘をつくり、いろゝのたからものをのせ、陝城縣といふ所の崔成甫といふ者を、身にはしきのかざりをし、かうべにはくれなゐのはちまきをさせ、ふねのおもてにたゝせて、徳宝のうたをうたはせ、又、美人百人ゑらび、はなやかにかざらせて、ともゝにうたをうたはせ、ゆゝしかりしありさまを、玄宗、御覽なされて、御よろこびはかぎりもなし。故に、望春楼のうちにして、一日しゆゑんにひまもなし。王鉄、又、毎年のかれいのほかに、銭ときぬとを百億万つみたてゝ、君へすゝめたてまつる。これ、みなたみ百性のざいほうをうばひとりて、君へたてまつりしかども、「(四丁裏) 玄宗、かくとはしろしめされず、たゞこれ天下のざいほうは、下ばんみんにいたる迄、かやうにおほきものやらんと、つねにおほしめされけり。故に、金銀を見給ふ事は、ふんとのごとくにおもはれける。これよりして、民百性、みなゝゝひんくわたへかねて、こゝかしこへとるらうして、天下おほひにみだれけり。されば、玄宗皇帝、御くらゐにつかせ給ひてより、

みとせがうちは錦をやき、金をとらかし、ゑいくわをきはせ給ひしかども、つゝにはこゝろおごりつゝ、よくしんにまよひゑいくわをこのませ給ひけり。故に、安禄山、天下にらんをおこして、玄宗、くらぬをうしなひたま(五丁表)へり。こゝをもつてあんずれば、みだるゝ事もおさまる事も、ゑいぐわにおおるとおごらざるとのうちにある。されば、てんかの君たる人は、たゞつゝしむにしくはなし。」(五丁裏)

挿絵 「(六丁表)

挿絵 「(六丁裏)

便殿撃毬

唐の敬宗皇帝とてみかど一人おはしけり。しかるに、敬宗の御父、ほどなくすぎさせたまひて、いまだいく日もすぎざりしといへども、かなしみ給ふこゝろもなく、たゞあけくれゆふらんをこのませたまひて、内殿にみゆきなされ、列克明をひきぐして、馬にのり、毬をうち、又、かたはらにはくわげんをなし、つゞみをうち、ふへをふき、ほしひまゝなる御あそび、申もをろかなるとかや。又、錢をもつてちからある人をやとい、あけくれかれらをめしつれたまひて、狐をとり、狸をとらへて、御なぐさみとしたまへり。されば、百官、「(七丁表)公家の人々たち、まい日しゆつしをなすといへ共、げんざんまします事もなし。かるがゆへに、しんかたち、きみをうらみたてまつりて、しゆつしを申人もなし。其後、つゝにむほんおこりて、敬宗、位をうしなひ給へり。されば、敬宗皇帝は、もとこれ聡明のきみにして、そのちゑふかしといへども、たゞ幼少の御時、がくもんせさせ給はざるにより、小人にひかされて、あくぎやくぶたうになり給ふ。こゝをもつてあんずれば、てんか太平におさまる事、これがくものしるしたり。」(七丁裏)

挿絵 「(八丁表)

挿絵 「(八丁裏)

寵信伶人

唐の莊宗皇帝と申て、みかど一人おはしけり。しかるに莊宗皇帝、よく音律にたつし、五音の事をしるしめし、つねにおんがくをこのませたまひて、まい人おほくあつめたまへり。こゝに列夫人と申て、きさき一人おはしけり。みかど、てうあひあさからず。しかるに、みかど、列夫人をなぐさめんとて、御身をよそをひ、まいじんとまじはりて、御てんのはにたちいで、まいあそびたまひしかば、もろくのまひじんども、きみをかろしめたてまつり、上下のわかちをしらず、ともくにはたはぶれて、きみを名づけて、「(九丁表)李天下といふ。あまつさへ、まいじん共、宮中へいでりて、士大夫をそしり、こゝある大將をざんそうす。みかど、この事をまことなるらんとおぼしめし、士大夫をうとみ、諸將をにくみたまひけり。かるがゆへに、しんかたち、きみをうらみたてまつり、すでにむほんをくはたて、たちまち君をいころし、かのおんがくのだうぐをあつめて、きみのしがいのうへにつみ、火をもつてやきにけり。それ、莊宗皇帝は、はじめかんなんをつくして、数度のかつせんをなし、あまたのてきをほろぼして、天下をとらせたまふといへ共、こゝろをほしひまゝにして、ゑいくわをきはめ給ふ」(九丁裏)ゆへ、つゝに国をほろぼして、あざけりをまつだいまでのこさせ給ふぞうらめしけれ。それ、てんかの君たる人は、かぐみとすべき事とかや。」(十丁表)

白紙 「(十丁裏)

挿絵 「(十一丁表)

挿絵 「(十一丁裏)

上清道會

宋の徽宗皇帝とて、御門一人ましませり。然るに、徽宗、常に仏法をしんじ給ひて、まづあらたに宮殿をたて、名づけて上清宝籙宮といふ。此宮におゐて、林靈素といひし僧をめされて、御ときをくだされ、徽宗もともに御出なされ、御ときをすゝめ給ふ。又、御ふせとして、錢三百貫いだされけり。此くやうを名づけて千道会と申なり。此時、あまたのぼんにん、きせんの人をあつめ、みなく宮へいれさせ給ひて、林靈素に經文をとかせて、ちやうもんせさせ給ひけり。又、徽宗も、靈素がまへにむかひ、高座にのぼらせたまひて、ちやうもん(十二丁表)なされ給ひけり。もし御ふしんなる所をば、靈素が前に人をおき、らいはいさせてとはせらる。然るに、靈素、せつはうの中、ざけうなどをいひければ、ちやうもんの人々、一度にどつとわらひけり。君臣同坐にまじはりて、つゝしみのれいぎなし。是より徽宗を名付て教主道君皇帝といふ。されば、徽宗は天下ばんみんの君として、王法のたゞしきをすて、道者のよこしまにしたがひ、みだりにぼんにんにまじはり、ゑきなき道を聞給ふ事、是わざはひのもとひなり。ある時、徽宗、北の方にみかりなされ給ふ時、ふりよにわざわひ出きたり、五国城と云所にて、つゐにむなしくなり給へり。(十二丁裏)

挿絵 「(十三丁表)

挿絵 「(十三丁裏)

應奉花石

宋の徽宗皇帝は、つねに花木をこのみ、石をあつめて、にはをつくらせたまひけり。こゝに蘇州の朱冲といひし者、みかどの花をこのみ、石をこのませ給ひて、方々よりもとめさせ給ふ由をうけたまはり、さらば花石をもとめ、我が君へたてまつらんとて、すなはち浙江といふ所へいたり、はなをあつめ、石をもとめて、徽宗へたてまつる。御門、ゑいらんまし／＼て、御よ

ろこびはかぎりなし。是よりして、毎ねん年貢にかけて、花石をとらせ給ひけり。故に、淮水、汴水の二つの河に花石をつみたるふねどもは、へんしもたゆるひまぞ(十四丁表)なし。又、蘇州のうちに應奉局とて、花石をあつむるところをこしらへ、朱冲が子、朱勳に仰せつけられて、花石のぶぎやうをせさせたまへり。朱勳、君の仰せをうけたまはりて、あけくれ花石をもとめ、こゝの山のほり、かしこのやぶのうち、しんさんさわべにいたるまで、のこらずゆきてたづねけり。又、人のはのうちに、石や花木のありけるを、朱勳、此由きければ、あまたの人をひきぐし、いづれもきなるはちまきをして、かの家にいたり、これ、みかどのおほせなり、とて、石や花木をほりおこし、家をこぼち、かきをやぶりて、花石をはこびけるとかや。又、高山のうへなどに、見ごと(十四丁裏)なる石のあれば、おほくの人をもよをして、やまをくづし、たにをうめて、車をもつてひきにけり。又、河のふちなどに、よき石のありければ、いかほどふかしといへ共、いろ／＼のはかりことをめぐらして、思ひのまゝにとりいだし、いそぎきみへたてまつる。故に、民百性、あけくれやくにつかはれて、田はたをたがへすひまもなく、みな／＼ひんくわにくるしみて、妻や子をうりなどして、やう／＼のちをつらねけり。これみなきみのなすわざなり。かゝるぶたうのきみなれば、やがてむほんをこりつゝ、ほどなくむなしくなり給ふ。(十五丁表)

白紙 「(十五丁裏)

挿絵 「(十六丁表)

挿絵 「(十六丁裏)

任用六賊

宋の徽宗皇帝は、代々太平のみよをつぎきたらせたまへば、金銀ざいほうにいたるまで、さらにとぼしき事はなし。こゝに蔡京とて、一人のしんか

あり。君、かれをうやまはせたまひて、宰相のくらゐになし給ふ。故に、蔡京がいせひのほど、よにならびはなかりけり。しかるに、蔡京、きみをすゝめたてまつりて、毎日ゆさんにひまぞなし。あるとき、徽宗、もろ／＼のしんかをあつめ給ひて、しゆゑんをなされ給ふとき、きみよりのたまのさかづきをいさせたまひて、しんかにしめしてのたまひけるは、まことなるかな、此（十七丁表）さかづきは、大花にいたり、と仰せければ、蔡京、うけたまはり、すなはち申あげけるは、きみ、天子のたつときくらゐにまし／＼て、あまねくてんかよりたからものをたてまつる事、そのかずさらにつくしがたし。しかるに、なんぞこのすこしきなるさかづきをもつて、大花にいたるなどゝてほめさせ給ふはいかならん。徽宗、又、おほせけるは、我がち／＼、御くらゐにましませしとき、すこしきうてなをたて給ふをだに、いはれざる御事とて、ふかくいさめをなすとき。蔡京、申けるは、されば、人の申事は、まことにいつはりおほし。かならずまことゝしたまふべし（十七丁裏）からず。たゞとにもかくにも、君の御心にまかせ給ひて、御なぐさみを多給ふべし。徽宗、げにもと思召、毎日ゆさんをこのみ、榮花におごり給ひて、人の諫を聞給はず。蔡京、又、あらたに法度を立て、民の財宝をうばひ取、君一人の宝とし、又、ひろく宮殿をつくりて、君にゆふらんをすゝめけり。延福宮と申て、おほきに御殿をたて、又、其かたはらに河をほりて、景龍江と名づけ、たかく山をきづきて、艮嶽と名づけ、いくばく金銀をつるやす事、其数さらにはかりがたし。是みなたみの宝をうばひ取て、かゝる榮花におごらせ給ふ。故に、民百姓、次第／＼にをとるへて、君をうらみたてまつり、（十八丁表）天下に乱をおこさん事、あけくれ思ひけるとかや。徽宗、かくとはしろしめされず、御心をほしひまゝにして、御ゆふらんにひまぞなし。又、蔡京をうやまひ給ふ事、いよ／＼おこたる事はなし。故に、蔡京がいせひのほど、天下四海にきこえしかば、おそれざる者さらになし。さて又、梁師成・

李彦、此二人をば、宝ぶぎやうをさせたまふ。又、朱勳は花木や石のぶぎやうたり。王黼・董貫、此二人は、敵をせめ、あたをふせぐ大将たり。故に、天下ばんみんをしなべて、此六人の者共を名づけて、六賊といへり。あぐぎやく無道なる事は、申もろかなるとかや。そのうち、蔡京は、六賊のかしらたり。此六（十八丁裏）人の者ども、君をすゝめたてまつりて、榮花をこのみ、ゆふらんをたのしめり。是によつて、民百姓、君にそむきたてまつり、靖康のとしのうち、金といひし所より、すでにみやこへせめ入、徽宗父子をいけどりて、つゐに害したてまつる。つら／＼是をあんずるに、みな六賊のわざはひたり。徽宗は、たゞ無道にてましますに、いはんや蔡京がごとくなるあぐぎやく無道の臣下ありて、君をすゝめ申故、いよ／＼心みだれつゝ、よくをかまへ、おごりをきはむ。是わざわひをまねき、天下大乱のもとたり。されば、孔子のの給へり。一言にして国をほろぼすものなり。それ、忠臣の輩は、君の無道をいまして、つねに諫をなし、忠言耳にさかふと（十九丁表）いへ共、終はさいわひをえるとかや。又、佞臣の言は、一たん心にかなふといへ共、必わざわひのもとたり。それ、天下の君たる人、これを能々心へて、常に忠言をこのみなば、天下太平にして、長久のみよたるべし。

帝鑑図説卷第十二終

于時寛永四卯丁年

十一月下旬

洛陽三条寺町誓願寺前

八尾助左衛門尉開版（十九丁裏）

挿絵 「（二十丁表）

挿絵 「（二十丁裏）